

---

# ピノキオ。

シキ。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ピノキオ。

### 【Nコード】

N74380

### 【作者名】

シキ。

### 【あらすじ】

古びた絵本のような、ノートの隅に書き殴った落書きのような、保健室でぼんやりと思索するような、退廃的ながらも優しい小説が書ければいいなと思っています。

おや。

ふえのおとがきこえてきたよ。

1、

夜。

道も家も商店街も誰かの足跡も、雪が真っ白に染め上げていく。

12月の終わり、聖なる夜として去年までお祭り騒ぎだったその日、あるいはお祭り騒ぎになるはずだったその日、街には人の気配がなかった。

ただ一人の少年を除いて。

夜に、外に出てはいけないよ。

悪い子はみんな、笛吹き男に連れていかれてしまうから。

その噂が街へ広まりはじめたのは、二週間ほど前のことだ。親が働きに出ている間に、幼い兄妹ふたりが忽然と姿を眩ましたそのときから。

それから頻繁に同じような事件が起こるようになった。ある家ではわがままな息子が消え、ある家では羊飼いの娘が消えた。

共通して真夜中に消え、近所の人間は「笛の音が聞こえた」と口を揃えて言った。笛の音がして、すぐに眠くなってしまった。あとは覚えていない、と。

まるで、どこかのおとぎ話のように、誰一人として帰ってはこなかった。

それでも警察が動かないのは、被害者の家族が何故か誰一人として被害届を出さないからだといわれている。

それからこの街には、夜に出歩くと連れ去られてしまうという噂がある。

誰もいない街の中、少年は真っ白な道に灰色の足跡を点々と落としながら歩いていた。

家には電飾が施され、ピカピカと眩しいほど鮮やかに道を照らし、

家々の窓からもれる赤っぽい光が少年に人の存在を感じさせる。

少年は、丈の長い茶色のコートの裾から赤くなった指を出し、その手を口にあてがって大きく息を吐いて小さな肩を丸めた。

不釣り合いなほど長くて分厚いマフラーを重たげに口元まで上げ、目深に二ツト帽を被り直す。

幼さの残る大きな目が半分ほど隠れ、重たそうな前髪が少年の視界にちらちらと映り込んだ。

「あーあ。つまらないなー」

少年はわざと大きな声を出した。

少し周りの様子を見まわすように首を動かすと、少年は小さなため息をついた。

ため息は白い霧となつて、ふわりと冷たい空気に溶けていく。

皆無関心だ。自分の子供で精一杯で、他の子のことまで目がいかないのだろう。

誰かが気づいてくれれば、家にだって帰れるのに。いいです、一人で帰れますって言えるのに。

少年はぼんやりと考えながら、バス停のベンチの雪を払い落として腰をおろした。

「早く来ないかなあ……」

今度は誰にも聞こえないように呟き、時刻表に目を向ける。

最後のバスはとつとここに通り過ぎて行ったようだ。

これでいい。そういえば、こんな夜中に外にいるのは初めてだと気付いて、少年はにんまりと笑みを浮かべた。

少年が待っているのは、心待ちにしているのはバスなんてものではない。笛吹き男だ。

数日前、少年は兄からの情報でその存在を知った。友達のような関

係である兄が、他愛のない日常的な会話の中で思い出したように言った、笛吹き男の存在。

もともと本が好きだった少年は、物語に出てくるような事件を聞いて胸が躍るような気分になった。

笛吹き男がことは違う別の世界に連れて行ってくれるなんて、そんなに素敵な話がどこにあるだろう！

「……………」

待てども待てども、一向に笛吹き男はやってこなかった。

降り積もる雪を見ながら、少年は再び冷えた手を暖める。

身体が芯まで冷え切って、手が身体に触れるのも冷たい。まるで死人のそのような温度だ。

少年は投げ出していた足をベンチに上げ、その足に顔をうずめた。

真冬の気温が痛いくらいに少年の細くて頼りない体を冷やしていく。

そろそろ見つかってしまいかもしれないな、と思った。

あの人たちは、オレのことを探しているだろうか。

それとも、どうでもいいって思っているだろうか。

身体を動かすのも億劫だ。

このままここにいたら、どうなるんだろう。

死ぬのかな。

「連れて行ってくれるなんて、嘘じゃなかよ……………」

ぽつりと言った、次の瞬間。

どこからか、優しく、楽しげで、どこか悲しそうな――

笛の音が、聞こえた。

2、

「——え？」

風に乗って聞こえてくるその音は、耳をよくこらさなければわからないほど小さなものだった。

でも、確かにこれは、笛の音だ。

横笛だろうか。少年は寒さも忘れ、ベンチから降りて音のする方向へと向かった。

何の侵略も受けていない真っ白な世界に、ざくざくと靴の跡をばらまきながら、頼りない歩調で懸命に走る。

電飾に彩られた街を抜け辺りを見回すと、その音は小高い丘の上から聞こえてきた。

ふと、少年の心に迷いが生じる。

あの丘の先には人食い熊や狼のいる怖い森があつて、絶対に足を踏み入れてはいけないときつく言われていたからだ。

笛の音が小さくなっていく。それを聞いて、少年は唇を固く引き結んだ。

怖いものか。オレだって、もう15歳だ。今更怖がる必要もない。

息を切らしながら丘の上に立つ。

「……………わ……………」

ふと振り返って、少年はその景色に言葉を失った。

さっきまでいた街が、電飾で宝石をひっくり返したように輝いていた。

街自体が宝石であるかのような。手を伸ばしたら、ざらりとすくい

取れてしまいそう。

夜景なんて見たのは初めてだ。こんなに綺麗なものだったなんて。笛の音が心地良く鳴り響いて、少年は目を細める。

笛？

はっと思いだした。そうだ、笛吹き男を追っていたんだった。少年はくるりと踵を返し、笛の音のするほうへと再び走った。

笛の音がだいぶ近い。

少年は遠くに人影を見つけ、反射的に木の後ろに隠れた。そして、はつきりと見てしまった。

笛を吹く影のうしろに、パジャマ姿の子供たちの影が何人かついていくその光景を。

「……………本当だった……………」

その言葉が驚きから出たのか恐怖から出たのか興奮から出たのか、自分でもよくわからなかった。

まさか、本当に笛吹き男が実在したなんて。

っ、

笛の音が、止まった。

笛を吹いていた人影がこっちに気づいたようだ。

少年が人影に向かって何か言おうと口を開いた瞬間。

先ほどとは違った旋律が耳に入って、視界が真っ黒になった。

「……………つぶわぁ！」

再び目を開けて豪快に起き上がると、身体の下にふわふわとしたものがあることに気付いた。

真っ白な敷き布団だ。掛け布団も、身体にしっかりとかかっている。綺麗な布団に、同じく綺麗に片付いた自分の部屋。

窓からは、真っ白く染まっていたいつもと変わらない景色が見える。

真っ黒なジャージも、昨日のままだ。

少年はいつの間にか、自分の部屋で眠りこけていたのだ。

「あれ？」

見ると、上着とマフラー、帽子もしっかりとハンガーに掛けられていた。

夢？

少年は首をひねった。

確かに昨日、真夜中にこっそりと此処を飛び出したはずだ。できる限りの厚着をして、寒い中をひとりで。それにしても、なんだかとてもリアルだった。

ベッドから起き上がって、大きく伸びをする。

まあ、楽しい夢だったじゃないか。寒かったけど。

少年はいつものように、いつの間にか机に置かれていた朝食を摂ってから歯を磨いた。

窓の外の景色をぼんやりと眺めながら、窓際に置かれた写真立てを手取る。

写真の中に写る少女は、今日も屈託のない笑みを浮かべていた。

「にいちちゃん、今日すげえ夢見たよ、ユキ」

少年は慈しむように、写真の少女の頭を指先でなぞった。

「夜の景色がすっげえきれいでさ。お前にも見せてやりたかったな」

ひとりごちながら、少年はマフラーに触れる。

「！」

マフラーはじっとりと濡れて、余計に重みを増していた。まるで、出かけた後のように。

部屋の中から手ですくい取った、あの雪の塊のように。

少年は思い立ったように再びコートを羽織り、マフラーと帽子をひつつかんだ。

### 3、

外に出ると、街は昨日の夜の静寂が嘘のように賑やかになっていた。あちらこちらに赤い服を着たお爺さんの置物が立ち、子供たちは楽しげに親と手をつないで歩いている。

露店が並び、買い物を楽しむ家族がたくさん集まって、街はおもちゃ箱をひっくり返したように騒々しい。

軽快に鳴り響くアコーディオンやギターの音を聞きながら、少年はまんざらでもないような気持ちでマフラーを口元まで上げた。少し進むのだけでもかなり苦労しそうだ。

――ぼすつ。

「うわっ！」

突然背中に当たった雪玉に、少年は大きな声を出して振り返る。

見ると、街の子が三人、雪玉を手になやと嫌な笑いを浮かべて少年を見ていた。

耳当てをした短髪の男の子と、がっちりした男の子、やたら派手な色調のスカートの女の子。

リーダー格なのだろうか、短髪の子が一步前に出て、他の子は一步下がっている。

少年はすこしむっとしたような顔をして、彼らを見据えた。

短髪の子が、手に持った雪玉を再びこっちに向かって放つ。

とつさに腕で顔をかばうと、雪玉は両腕に当たって形を崩しながら落ちた。

「やめろよ、もう！」

少年が叫ぶと、相手はげらげらと笑って、面白そうに手を叩いた。  
何が面白いのだろうか。少年には全くわからなかった。  
怪訝な顔を見ると、短髪の子が歩いて近づいてきた。

「ハコイリムスコ、今日はひきこもってなくていいの？」

「っ」

少年は驚いたように、頭ひとつ分高い相手を見上げた。  
少年は彼らのことを知らなかったが、どうやら彼らは少年のことを  
知っているらしい。

「駄目よラグ。あんまりいじめると、泣いちゃうじゃない？」

女の子の楽しげな声が聞こえた。

「とつくの昔に、笛吹き男にさらわれたと思ってたよ。お偉いさん」

女の子の声を無視して、短髪の少年、ラグがけらけらと笑いながら  
言った。

少年は強い眼差しでラグを見返す。

「違つよ、お偉いさんになるのは、その子のお兄ちゃん」

がっしりした子がのんびりとした声で訂正を入れた。  
チクリと言葉が胸に刺さる。

「その子は拾われた子だもの。ベツカはなんでもわかるんだからね、  
金食い虫ーっ」

ベツカと名乗った女の子が馬鹿にしたように笑う。

「オレは金食い虫じゃない！」

反射的に反論したが、復唱したらあながち間違っていない気がして、  
それが一層少年の心に深く刺さった。

「養子のくせにさ、金ばかりかけて、いい扱い受けて。いい迷惑  
だよなあお前」

「……………っ」

言葉が見つからない。

反論したいのに、反論できない。

「なあ、知ってる？笛吹き男に連れ去られた子供が、捜されない理

由」

襟ぐりをつかみ上げられ、少年はぐと息を呑んだ。

「理由……？」

「ぼくたち、調べてみたんだよ。連れ去られた子供の家に行って、なんで子供を探さないんですかって」

がっしりした子が、間の抜けたような声で注釈を入れる。

「そうそう、ホップの言うとおり。すっごく頑張ったんだからね！」

ベッカも口をはさんだ。どうやら、がっしりした子はホップというらしい。

ホップは雰囲気がとても穏やかだったので、少年はぼんやり、あの子となら友達になってもいいかな、と思った。

「なあ、聞いてんの？」

「え？」

前に視線を戻すと、ラグは不機嫌に顔をしかめて少年をにらみつけ

ていた。

少年がやばい、と苦い顔を見ると、ラグはやれやれと大きくため息をついて、言葉を続けた。

「で、調査の結果。俺たちはひとつの結論に辿り着いたワケ」

「結論？」

「そう」

ラグはまたいたずらに笑い、少年の耳元で囁いた。

「笛吹き男に連れ去られた子は皆、知らない子だった、ってこと」



4、

いない子。

その言葉に、少年は胸がぎゅっとなるような息苦しさを感じた。

「おまえもいない子なんだから、迎えに来るかもよ。笛吹き男が」

「——オレは、」

「ラグー？みんな、そろそろ行きますよー」

女のひとの声が重なるように鳴って、ラグが慌てたように少年の襟元を掴んでいた手を離れた。

少年は怪訝な顔をして、声のしたほうを向いた。

見ると、帽子を被った女の人が、色とりどりの野菜が入ったバッグを腕にかけて手を振っていた。  
ホップとベッカもいる。

「はい。今行くよ、ママー」

ラグは大げさに手を振り返してから息をつき、少年をにやりと見下した。

「じゃあな、金食い虫さん」

少年が反論する間もなく、ラグは走って「おかあさん」のところへ  
と行ってしまった。

少年は意味もなく服をはたき、帽子を目深に被り直す。

知らない子が連れ去られているというのは、少年も薄々感づいてい  
た。

だからこそ少年は昨日まで待ち続けていたのだ。

眠れない夜をいくつ過ごしただろうか。

それでも、笛吹き男は迎えに来てくれなかった。

多分笛吹き男は、オレの存在自体を知らないんだろうと、少年は思  
った。

笛吹き男は雲の上から自分たちを見ていて、親に愛されていない子  
を連れて行ってくれるのだ。

滅多に外に出ることのない子供のことなんて、きっと見えていない  
のだろうと。

だから、昨日はこっそりと外に出た。

そして今も、こっそりと外に出ている。

布団の下に大きな縫いぐるみを置いておいた。気付かれなければい  
いのだけだ。

「……………ふんだ。マザコン」

少年は覚えたてのその単語を呟いて、またとぼとぼと歩きだした。

「ふう……………っと」

丘の上に登って、少年は後ろを振り返った。

真っ白な空に、真っ白な地面。空と地面の境界線を街の建物だけが主張した、幻想的な景色。

綺麗に光ってはいなかったけれど、昨日見たあの景色に間違いない。この近くで、あの笛吹き男に会ったのだ。

ごくり、とつばを飲み込んで、好奇心と恐怖心とが入り混じった感情を抑え、少年はゆっくりと森に続く坂道を下って行った。

なぜだかもう戻れないような気がして、それでも少年は歩き続けた。この先には何があるのだろうか。

白い地面に、一対の足跡だけが伸びていった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7438o/>

---

ピノキオ。

2010年11月8日13時14分発行